

大学生におけるソーシャルサポートと

キャリアレジリエンスに関する研究

スポーツ経営組織学ゼミナール 1315069 渡邊 和史

1. 研究動機・研究目的

厚生労働省（2018）によると、大卒者の3年目までの離職率は平成27年度卒業の大学生で24%であり、離職率も高く、就職ミスマッチなどが問題となっている。大学生を取り巻くこのような環境の中で、大学でのキャリア教育は様々な形で行われている。キャリア教育とは、学生の社会的・職業的自立に向け必要な基盤となる能力や態度の育成を通じてキャリア発達を促す教育（中央教育審議会 2011）、すなわち、若者のキャリア発達及びキャリア形成を促す教育である。そして、正課の授業はもちろん、クラブ・サークル活動などの正課外活動もキャリア教育の重要な要素とされている（佐藤 2007）。

すなわち、社会情勢の変化や仕事にまつわる様々な危機に直面した際には、自らそれに対し、回復していく力の育成が重要視されており、こうした概念は、近年のキャリアに関する研究においてキャリアレジリエンスと呼ばれている。また、Super(1980)がキャリアを「生涯の過程において、個人によって演じられる人生役割の結合と連鎖」と定義しているようにキャリアは就業前から形成されている。先行研究では、例えば大学の運動部への所属している人はしていない人に比べレジリエンスが高いこと（友田・根岸 2016）や、クラブ・サークル活動を通じた適応力（浜崎ほか 2010）、問題解決能力の獲得（秋元 2012）などが示された。

しかし、キャリアレジリエンスの育成を促す支援としてどのようなものが有効であるか、といったことを明らかにした研究は少ない。よって本研究では大学生のキャリアレジリエンスの形成に及ぼす外的要因としてソーシャルサポートに着目した。

2. 研究方法

本研究では、質問紙調査法として、日本語版ソーシャルサポート尺度と大学生用キャリアレジリエンス尺度を使用した。ソーシャルサポート尺度は、「家族のサポート」「大切な人のサポート」「友人のサポート」の3因子12項目から構成される。回答方法は7件法（⑦非常にそう思う、⑥そう思う、⑤ややそう思う、④どちらともいえない、③あまりそう思わない、②そう思わない、①全くそう思わない）である。そして、大学生用キャリアレジリエンス尺度は、「問題対応力」「ソーシャルスキル」「新奇多様性」「未来志向」「援助志向」の5因子34項目から構成される。回答方法は4件法（④非常によくあてはまる、③ややあてはまる、②あまりあてはまらない、①全くあてはまらない）である。

また、本研究において環境要因も尺度の得点に影響を与えている可能性があるため、フェイスシートにおいて質問事項を追加し調査を行った。

3. 主な結果と考察

日本語版ソーシャルサポート尺度と大学生用キャリアレジリエンス尺度による相関分析の結果、日本語版ソーシャルサポート尺度と大学生用キャリアレジリエンス尺度に相関が見られた。これは理論仮説を支持するものであり、ソーシャルサポートの得点が高い者は、キャリアレジリエンスの得点が高い結果となった。このことから大学生に対して、サポートを充実させる環境や友人や親からの支援を受けることができる機会を提供していくことがキャリアレジリエンスの向上の要因の一つと考えられる。また、大学生の所属するコミュニティによってキャリアレジリエンスの向上へつながる機会は異なり、サポートの量も異なると考えられ、コミュニティの特性についても研究の余地があると考えた。また、本研究ではキャリアレジリエンスをプロセスではなく個人の持つ能力・特性として扱ってきた。そして、ソーシャルサポートとの相関は示されたものの、大学生が社会人になる際に生じる困難や、働く中で起きる苦境をどのように乗り越え、どのようなサポートが関連しているのかについては今後検討が必要である。

4. 結論

本研究では、大学生のソーシャルサポートがキャリアレジリエンスに及ぼす影響を明らかにすることを目的として、日本の大学生へ向けてアンケートを行った。今回は、366名しか集計することが出来なかったがさらに多くのサンプルの母数を得ることで、本研究より信憑性の高い結果が得られることが考えられる。また、ソーシャルサポートは個人の対人関係や個人を取り巻く環境などによって異なる結果が示されることが予想される。そして、web調査のため回答者が偏り、所属学部や課外活動、出身地などの属性において偏りがあったため、その点を考慮することで、さらに精度の高い調査が行うことが可能であろう。以上を今後の課題とする。また、キャリアレジリエンスは大学生の時期によって変容しうるものであると考えられる。今後はより長い期間で横断的な研究を行い、その中での周囲からのサポートがキャリアレジリエンスの変容にどのように関連しているかを検討する必要がある。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文の執筆にあたり、多くの皆様のご指導ならびにご支援を賜りましたことを心より感謝申し上げます。また、指導教官である水野基樹准教授には本研究に関して大学3年次の卒業論文中間発表の時より、本日に至るまで細やかなるご指導を頂きました。厚く感謝申し上げます。スポーツ経営組織学ゼミナールに入り、早いもので二年の月日が経ちました。部活動とゼミの両立に悩んだこともありましたが、周りの方々の支えもあり部活動もゼミナール活動も最後まで満足のいく取り組みをすることが出来ました。

そして、本論文の執筆するにあたり、スポーツ経営組織学ゼミナールの研究室の皆様には、多大な助言を賜りました。特に、大学院生の方々にはお忙しい中でテーマの設定から詳細な書き方まで丁寧なアドバイスを頂きました。最後に、アンケートに協力して下さった順天堂大学の方々、男子蹴球部の方々、高校の同級生の皆様には多大なご協力を頂きました。皆様のご協力がなければ、この論文を完成させることは出来ませんでした。アンケート実施を快く承諾して下さった皆様にも心よりお礼申し上げます。